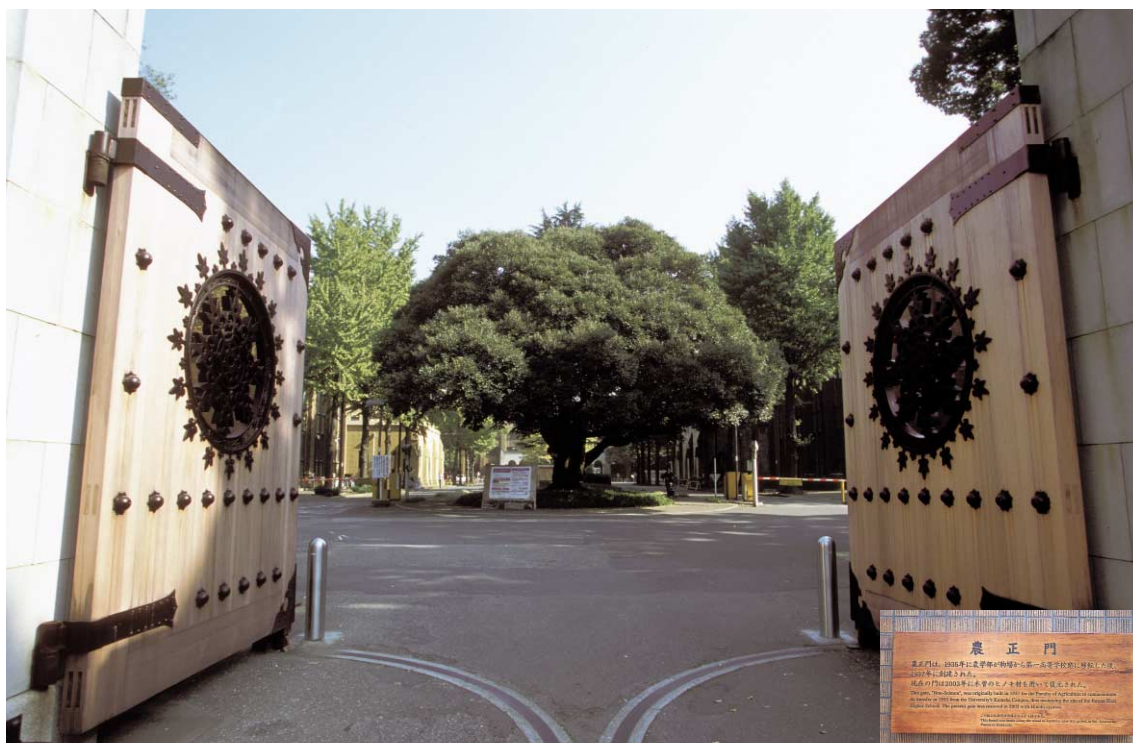




学内広報

No.1307

2005.2.9
東京大学広報委員会



農正門（2ページに関連記事）

CONTENTS

部局ニュース	2	21世紀COE「融合科学創成ステーション」第2回 国際シンポジウムのお知らせ、戸塚洋二先生文化 勲章受章記念講演会のお知らせ	
退職教員の最終講義、東大病院へ（財）日本医療 機能評価機構より病院機能評価の認定証が交付さ れる、弥生キャンパスにおける環境と交通量、海 洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターにて海洋 調査船新「弥生」竣工、『メディアとしての建築ー ピラネージからEXPO'70まで』展のお知らせと内 覧会・レセプション開催の報告		事務連絡	6
掲示板	5	人事異動（教員）	
		窓	7
		失われた帝大新聞を大量に発見	
		淡青評論 組織名称簡略化のすすめ	8

退職教員の最終講義

このたび、本学を退職される方々の最終講義・講演の日程と題目をお知らせいたします。

大学院工学系研究科・工学部

定方 正毅 教授 3月4日(金) 13:00~
 (化学システム工学専攻) 5号館1階51、52、53号講義室
 「中国環境問題とエコトピア社会実現に向けての工学的アプローチ」

大学院医学系研究科・医学部

栗田 廣 教授 3月8日(火) 14:30~16:00
 (健康科学・看護学専攻、精神保健学分野)
 医学部本館大講堂
 「小児期崩壊性障害について」

医学部附属病院

東大病院へ(財)日本医療機能評価機構より病院機能評価の認定証が交付される

医学部附属病院では、病院機能の改善のため(財)日本医療機能評価機構の病院機能評価を受審した結果、平成17年1月24日(月)付けで、機構の定める認定基準を達成していることが認められ、認定証が交付されました。

評価の受審に際し、患者さまの権利と職業倫理を遵守するための院内体制をあらためて確立し、医療事故の再発防止策の徹底を図る等、さまざまな病院機能の改善を行い、今回の認定となりました。

評価を受審した結果、効果的で具体的な改善目標を設定することが可能となり、医療の質の向上と職員全体の自覚により院内全体の改善意欲がさらに向上しました。

今後も、病院機能の改善を進め、「安全、安心、思いやり」の医療を推進し、我が国の医療の発展に寄与していきたいと考えております。



認定期間	平成17年1月24日(月)~ 平成22年1月23日(土)
認定証発行日	平成17年1月24日(月)
認定病院種別	一般病院
認定番号	認定第JC384号

大学院農学生命科学研究科・農学部

弥生キャンパスにおける環境と交通量

一昨年2月に農正門の入り口の並木を形造っていたヒマラヤスギが2本伐採されました。農正門を入ると、最初に椎の木(スダジイ)があり、続いて高さ20mを超す4本のヒマラヤスギが植栽されていました。ヒトの生活との関わりが深い椎の木は、成長の良いヒマラヤスギの被圧によってすっかり東側の葉量が減り、西側の農正門に頭を垂れる形でかなり偏重して今後の生育が危ぶまれました。そこで、ブナ科の代表的な樹木である椎の木の樹勢回復をどうするのか、また、成長の良いヒマラヤスギをどのように取り扱うのが検討されました。キャンパスの樹木調査の折りに調べた本郷キャンパス内のヒマラヤスギの樹形は、ほとんどが生来の性質を無視して下枝を切り落とされて丸坊主的な枝落としをされた木偶坊で、本来の樹形とはほど遠い哀れなものでした。平成8年に依頼されて行った総合図書館前の2本のクスノキの樹勢回復処理は2か月を要し、2千万円の経費がかかりました。その後、クスノキの樹勢は回復しましたが、樹形の回復は思わしくなく十分にその機能を回復したとは言えない状態です。そこで、椎の木の樹勢回復のために、狭い間隔で植栽された成長のよいヒマラヤスギを間引くこととし、その材をさまざまな形で利用することを計画しました。これらの経緯については弥生キャンパスのヒマラヤスギで作られた掲示板に示されています。

さて、最近のキャンパス内の建物工事に伴って、弥生キャンパスの交通量は飛躍的に増大し、生活環境は劣化の一途を辿っています。そこで、キャンパス内の交通量の状態を把握するために、農正門(本郷通り)、弥生一本郷キャンパス間の陸橋、裏門(言問通り)について交通量の実態調査を昨年12月15日(水)に行いました。

農正門の通用門は6時に開かれ、大扉の開門は7時、閉門はともに24時です。終日調査の結果、農正門付近の通行量はあわせて18,290人・台(農正門前歩道を横切った歩行者3,602人、自転車2,869台;農正門の入出構者8,980人、自転車1,773台、オートバイ167台、自動車899台)、弥生キャンパスに入構した総数は8,311人、農正門:陸橋:裏門=4:2:1でした。農正門と陸橋の歩行者数の推移を15分ごとに図1・2に示しました。農正門の通行量のピークは9時台、昼食時、17時台の3回で、

時間当たり800人でした。朝のピーク時には言問通り（根津駅）から本郷通り（東大前駅）への通り抜けによると思われる人の流れがあります。この傾向は17時以降の出入構からも判断され、弥生キャンパスを通勤時に通り抜け利用する近隣住民の通行人は400人程度と推測されます。一方、陸橋の通行量は農正門のほぼ6割の通行量の推移とピッタリと一致することから、約6割が東大前駅から農正門を通して本郷キャンパスへ通っていることとなります。

自転車についてみると、11時までに150台を超える出構があり、本郷キャンパスの教職員学生が弥生キャンパスを夜も駐輪場として利用していることが窺えます。また、自動車は、9時台に入構数が、16時台に出構数がピークとなりますが、17時以降にも120台を越える車が出構することから、日中のキャンパスは駐車場と化しているようです。

農学部キャンパスを利用する総数についてみると、ピーク時に約2,100人・台（図3）で、24時を過ぎてても在構している数は約250人・台で、かなりの数が24時以降に地震研の通用門を利用して帰宅しているか、あるいは徹夜して仕事をしているものと推測されます。

以上、昨年12月中旬の弥生キャンパスの通行量調査の一端を紹介しましたが、キャンパスにおける生活は、学生・教職員の教育研究の基盤です。農学部では、今後、事故のない過ごしやすいキャンパスの整備に努めたいと考えています。

（農学部キャンパス整備WG）

図1. 農正門 歩行者出入り

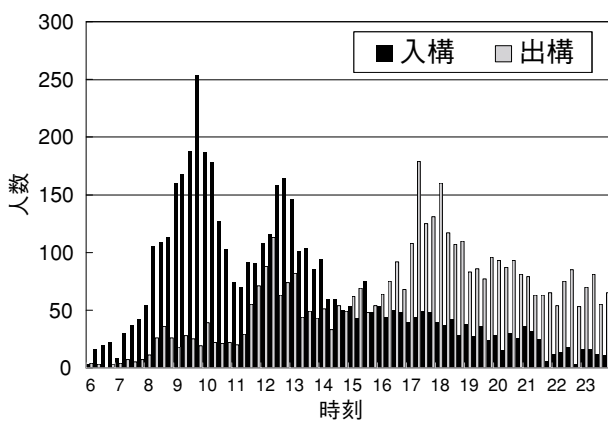


図2. 陸橋 歩行者出入り

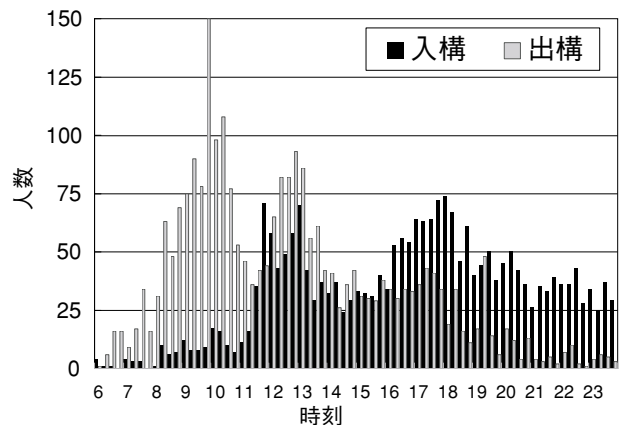
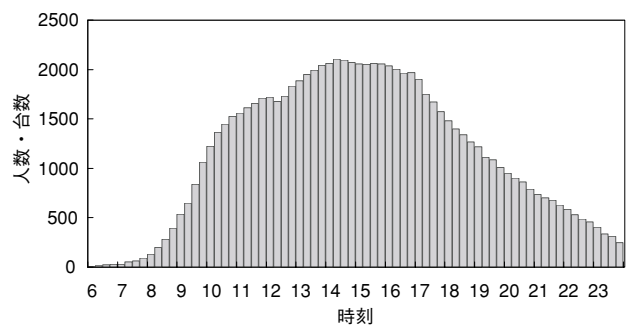


図3. 在構総数 (人・自転車・オートバイ・自動車)



海洋研究所

海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターにて海洋調査船新「弥生」竣工

旧船の老朽化に伴い新造された海洋調査船弥生が大船渡の造船所で1月17日（月）に進水した。また1月21日（金）にはセンター近くの係船場で竣工式が行われ、引き続き近くのホテルで祝賀会が開かれた。



竣工式での紅白もちまきの様子（写真提供：岩手日報社）

竣工式には岩手県地方振興局長や大槌町長はじめ、地元漁業関係者等合わせて200人近くが参加し、海洋研究所からは小池所長、寺崎センター長他30名が出席した。竣工式では、近年地元でも珍しくなった紅白の餅まきや神楽などが催されるとともに、近隣の子供達や住民にも船内を見学していただき、大盛況であった。

新造された弥生は全長13.1m、幅3.59m、最大速力24ノット、定員20名で大きさは旧船に比べて一回り小さくなったものの、速力・定員共に約2倍になった。また各種観測機器も最新鋭のものが装備された。新しい弥生の観測機能は大幅に強化され、本船を利用した今後の調査研究の成果が期待される。

総合研究博物館

『メディアとしての建築—ピラネージからEXPO'70まで』展のお知らせと内覧会・レセプション開催の報告

2月5日(土)から5月8日(日)まで、総合研究博物館新館で特別展示『メディアとしての建築—ピラネージからEXPO'70まで』展を開催します。また旧館では特別展示『「Systema naturae」—標本は語る—』展を引き続き開催し、2F展示ルームでは『蒙古高原の旅 江上波夫コレクション』展を同時開催します。

総合研究博物館における平成17年1回目の特別展は、<建築>をテーマに取り上げます。

建築を含む全ての人工物は、多少ともメディアすなわち情報媒体の役割を担うと言えるでしょう。

本展覧会では、もう少し焦点を絞り、その時代の建築・芸術の思潮に大きな影響を及ぼした建築の図像(例：ピラネージの版画など)や、国力や産業技術の力を謳い上げるために作られた建築(例：万国博覧会の建築)などに照明をあて、メディアたるべくデザインされた建築というものを取り上げたいと考えます。

展示物は、明治時代にヨーロッパから持ち帰られたG・B・ピラネージによる古代ローマの想像的復元図ほかの版画集(総合図書館所蔵)、18世紀の建築家による古代の建築遺跡の想像的復元の書物、万国博覧会の歴史に関する諸資料および映像などです。18世紀以降の近代という時代のなかで、建築が何を伝えようとしたのか、そのためにいかにデザインされたかを展示を通して見ていきます。

オープニングに先立ち、2月3日(木)に当館で内覧会・レセプションが開催され、佐々木毅総長、森亘元総長、建築家の磯崎新氏、煙山力文京区長をはじめ学内外から多数の出席者があり、盛況のうちに終了しました。



『メディアとしての建築—ピラネージからEXPO'70まで』展を担当した菊池客員教授による挨拶の様子

『メディアとしての建築—ピラネージからEXPO'70まで』展

会 期：2月5日(土)～5月8日(日)

休館日：月曜日(月曜日が祝日の場合は開館し翌日休館)及び2月25日(金)、26日(土)

『「Systema naturae」—標本は語る—』展

会 期：平成16年10月2日(土)～平成17年5月8日(日)

休館日：月曜日(月曜日が祝日の場合は開館し翌日休館)及び2月25日(金)、26日(土)

『蒙古高原の旅 江上波夫コレクション』展

会 期：平成16年10月2日(土)～平成17年5月8日(日)

休館日：月曜日(月曜日が祝日の場合は開館し翌日休館)及び2月25日(金)、26日(土)

開館時間：10:00～17:00(入館は16:30まで)

会 場：総合研究博物館

入 場 料：無料

問 合 せ：ハローダイヤル 03-5777-8600

H P：http://www.um.u-tokyo.ac.jp



総合研究博物館特別展示『メディアとしての建築—ピラネージからEXPO'70まで』

大学院総合文化研究科・教養学部

21世紀COE「融合科学創成ステーション」 第2回国際シンポジウムのお知らせ

シンポジウム・講演会

21世紀COEプログラム「融合科学創成ステーション」では、第2回目の国際シンポジウムを開催いたします。

本シンポジウムは、平成16年に終了した文部科学省COE「複雑系としての生命システムの解析(1999-2004)」が中心となった国際会議で、「複製細胞系」、「生物の可塑性と発生、進化」が主なテーマです。国内外から8名の気鋭の研究者を招待し、上記のテーマに沿った最新のトピックをレクチャーして頂く予定です。また、若手研究者によるポスター発表もあります。

なお、参加費は無料で、登録などの必要はありません。詳細は、HPをご覧ください。

皆様の参加をお待ちしています。

タイトル：

“Life as a Complex System: Constructive and Dynamic Approach to Cell and Developmental Biology”

日 時：3月5日(土)、6日(日)

場 所：駒場キャンパスI

数理科学研究科棟大講義室

H P：http://chaos.c.u-tokyo.ac.jp/21sympo/sympo2nd_index.html

宇宙線研究所

戸塚洋二先生文化勲章受章記念講演会のお知らせ

シンポジウム・講演会

本学特別荣誉教授の戸塚洋二先生(現高エネルギー加速器研究機構長)の文化勲章受章を記念し、講演会「ニュートリノと素粒子物理—現代物理学の最前線—」が開催されます。

みなさまの参加を心よりお待ちしております。

戸塚洋二先生文化勲章受章記念講演会 ニュートリノと素粒子物理—現代物理学の最前線—

日 時：2月26日(土) 15:00~17:00
(14:30開場)

場 所：エポカルつくば(国際会議場)

参 加 費：入場無料

定 員：1200名

講演内容：

○神岡実験とニュートリノ

中畑 雅行 宇宙線研究所教授

○加速器で探るニュートリノの謎

中村 健蔵 高エネルギー加速器研究機構教授

○夢の加速器ILC

戸塚 洋二 高エネルギー加速器研究機構長

(申し込み方法)

ホームページ(<http://www.kek.jp/WYP/kouen.html>)、電話、FAXによりお申し込みください(当日会場に余裕があればお申し込みがなくても入場できます)。

(問い合わせ先)

高エネルギー加速器研究機構 総務部庶務課庶務係

TEL：029-864-5114

FAX：029-864-5560

人事異動（教員）

発令年月日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（採 用）			
17.2.1	杉原正顕	大学院情報理工学系研究科教授	名古屋大学大学院工学研究科教授
//	井上雅文	アジア生物資源環境研究センター助教授	京都大学生存圏研究所助手
（昇 任）			
17.2.1	谷口伸行	生産技術研究所教授	生産技術研究所助教授
（配 置 換）			
17.2.1	広田光一	大学院新領域創成科学研究科助教授	先端科学技術研究センター助教授
//	香川 豊	国際・産学共同研究センター教授	大学院工学系研究科教授
//	佐藤文俊	情報基盤センター助教授	生産技術研究所助教授

※採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

原稿募集

「学内広報」に学内の情報をお寄せください。

- ・文字数800字以内（写真がある場合は文字数を控えめにしてください。）
- ・写真には、キャプション（説明文）を添えてくださるようお願いします。

送付先 東京大学総務部広報課
 TEL：03-3811-3393 内線：82032、22031
 FAX：03-3816-3913
 E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

原稿の締切は毎月第1・3水曜日、配付は翌々週の火曜日です。ただし、該当日が祝日の場合や、12月を除きます。

平成16年度の学内広報の発行スケジュール
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

「噴水」「窓」のコーナーにご意見を

「学内広報」には、みなさんから投書を寄せていただく欄として「噴水」、東京大学と社会との連携・協力情報を紹介するための欄として「窓」が設けられています。これらの欄への投書要領は次のとおりです。

「噴水」

- 1 本学における教育・研究活動等に関する意見を述べたものであること。
- 2 個人の投稿で所属・氏名を明記したものであること。
- 3 他者への非難・攻撃を含まないものであること。

「窓」

「東京大学とその周辺地域の歴史」、「学外機関より本学構成員への表彰」、「学外の方からの東京大学に関する意見」など、東京大学と社会との関係に関する情報であること。

以上の要件をそなえるものの中から、広報委員会が適当とするものを、適宜、掲載します。

失われた帝大新聞を大量に発見

現在も学生の手により週刊で発行されている東京大学新聞の前身は、大正9年創刊の「帝国大学新聞」である。帝大新聞は学内記事のみならず、大正・昭和期を担った多くの学者・文化人・政治家が執筆し、戦前・戦中日本の知的社会の重要なニュースソースであった。現在も資料的・学術的な価値は高い。

この帝大新聞は今から21年前の昭和59年4月に不二出版から復刻がなされた（不二出版・全17巻）が、実は、創刊号から56号までが収録されていない。復刻版準備段階でどうしても発見できなかったからである。

復刻の音頭をとった当時の東大新聞社理事長・故・内川芳美先生（新聞研究所名誉教授）、帝大新聞の大OBである故・殿木圭一先生（同）のもと、失われた号の必死の探索がなされたが、発見できなかった。

創刊号発見に100万円の賞金

われわれ東大新聞編集部OBにとっても、この失われた号を発見するのは、長年の悲願である。とりわけ、発行の辞とともに、ミケランジェロの天地創造が一面に大きく掲げられた創刊号は、写真でしか見たことがなく、ぜひとも実物をこの目で見たいと思っている。

と言ってもプロジェクトを組んで探すようなことはやったことはない。が、編集部OBは、なんとなく気にとめて探してはいる。

また、平成12年に行った創立80年の記念行事で、創刊号発見に100万円の賞金をつけた（まだ有効である）。つい先日、先輩の清水篤さん（昭和55年度編集長・現日本テレビ勤務）が、インターネットの古書店でひとつ発見したことが、OBで話題になったくらいで、創刊号はもちろん、他に発見できたことはなかった。

なんと駒場・近代文学館に所蔵！

ところが、昨年11月にたまたま総合図書館のリファレンスでこの話をしてみた。「私たちはリスト化されている資料は、探し尽くしていると思うが、どうしても発見できない。この前、牧野富太郎先生の植物コレクションから大量に貴重な新聞が発見されたという話があったが、おそらく総合図書館のどこかに、リスト化されていないかたちで転がっているのでは？」。

そして、約半月後の11月30日（火）、参考調査係の司書さんから驚愕すべきメールを受け取った。「帝国大学新聞の大正期刊行分は日本近代文学館にて概ね27～80号を原紙で所蔵しているようです」。

メールを受け取って、私は声も出なかった。まさか駒場のお藤元・近代文学館にあったとは！それもリスト化されて……。私は翌日、近代文学館に飛んでいった。そ

して……この目で実物を確認、あったのだ。27号～56号。復刻版で掲載できなかったもののうち、半分を見つけてしまった。大発見、大感動……。

昭和59年当時、復刻の編集作業にあたった船橋治不二出版社長にすぐ伝えたところ、「当時、東大内はもちろん全国の図書館・研究機関を探した。実は近代文学館でも、2つの号を見つけ、復刻版に収録したが、当時はそれ以外の号を見つけられなかった。駒場にあったとは意外、今後増補改訂したい」と今回の発見を喜んでいる。

トーダイもと暗し

司書さんに、どのように探したか聞いたところ、学術情報センターのNacsis-Webcatで発見したとのこと。Nacsis-Webcatは、大学の研究者なら誰でも使えるものであり、私もむろん「帝大新聞」を検索をしたことはある。が、ヒットしたことはないまま、最近はやっていなかった。

近代文学館にも問い合わせたところ、Nacsis-Webcatに参加したのが、平成14年の4月。そのため、それ以降はヒットする状況にあったようだ。ネットワーク強化の目に見える成果とも言えよう。このことの教訓は、発展するNacsis-Webcatで、1ヶ月に1回程度は、失われた文献を検索する習慣をつけるということか。

さて、なんとか、創刊号を含むあと半分を発見し、復刻版を改訂して完全版を世に出したい、とは、東大新聞OBの悲願であり、社会や諸先輩に対する義務だとも思っている。それにしても、ちょうど探索中の11月に亡くなってしまった内川先生に報告できなかったのが残念でならない。伝えることができれば、きっと、とても喜んでくれたにちがいない。

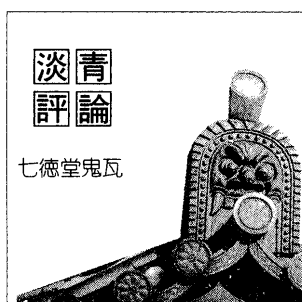
さて、残り。私は学内に絶対ある、と思っている。まさにトーダイもと暗し。どこぞの倉庫の箱の下に、あなたの研究室の書棚の隅に、創刊号が隠れている可能性は高い。ぜひ発見して、100万円をゲットしてほしい。

前田昭彦（東京大学新聞社理事・昭和58年度編集長、都留文科大学文学部助教授）

組織名称簡略化のすすめ

多くの大学が旧国立、公立、私立を問わず大学院化されている。それらの大学に共通する事態だが、大学院化に伴って組織名称が非常に長くなっている。私が赴任した平成4年4月には、所属名はスペルアウトすると東京大学医学部保健学科精神衛生学講座（18文字）であったが、現在は国立大学法人東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻健康科学講座精神保健学分野（42文字）と2.3倍となる。大学院便覧を見ると他部局では、もっと長くなる所もあるようである。

大学院化で分野数も旧講座数に比べて格段に増えており、同じ研究科の同僚の正しい所属分野名をスラスラと言うことはすでに困難である（重点化前の所属は比較的簡単に言えるが）。同じ研究科内の教員に文書などを送る場合は、その都度、分野名などを確認する必要がある、他部局の先生方に同じことをしようとすると、その苦労はさらに



増す。原稿執筆や講演を引き受けると、依頼者が私の所属の正式名称の確認に苦勞する。

私が本学赴任前に所属していた研究機関もセンター化されて名称が長くなった。すなわち、国立精神衛生研究所精神薄弱部（14文字）は、国立精神・神経センター精神保健研究所知的障害部（23文字）と1.6倍になった。その前に所属していた東京都精神医学総合研究所社会精神医学研究部門（22文字）も、機構改革で財団法人東京都医学研究機構東京都精神医学総合研究所社会精神医学研究系（34文字）と1.5倍となった。機構改革に伴い名称が長くなるのは旧国立大だけではないが、“国立大学法人”が先頭に付くことなどがあり、旧国立大の組織名称の長さは他の組織の追隨を許さないものがある。

長大な組織名称が簡略化されれば、ワープロで打つ文字数が減るわけであり、多くの手続きなどがずいぶんと楽になるであろう。お金はかからないが相当に頭を使いそうなことであり、是非、東京大学が率先してやったらよい“改革”の1つと思う。

栗田 廣（大学院医学系研究科）

（淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

〔訂正〕

「学内広報」において一部誤りがありましたので、訂正してお詫びします。

No.1303（2004.12.8）

5 ページ右段上から 8 行目

（誤）施設部 風間 勉 → （正）研究協力部 風間 勉

5 ページ右段上から 9 行目

（誤）施設部 肥塚 一郎 → （正）学 生 部 肥塚 一郎

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1307 2005年2月9日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務部広報課 ☎ 03-3811-3393

e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ http://www.u-tokyo.ac.jp/index_j.html



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO